新しい道後のカタチ。新しい旅館のカタチ。

3/26 全館リニューアルオープン！
フェーズフリーで安心な滞在を

外観

レディースルーム

デラックス和洋室

9/14 全室リニューアルオープン！
ギルディング和紙で彩る和の空間が完成

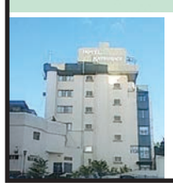
9階ホール

和室ベット

花スイート

葛城 Spa Resort 道後
089・931・5141　道後 葛城　検索

花ゆづき
089・943・3333　道後 花ゆづき　検索



〒790-0837　愛媛県松山市道後湯月町 4-16
FAX：089-945-4401
URL：http://www.hotel-katuragi.jp
E-mail：info@hotel-hanayuzuki.jp

FAX：089-943-3581
URL：http://www.hotel-hanayuzuki.jp
E-mail：info@hotel-hanayuzuki.jp

国際観光文化フォーラム 道後温泉で盛大に開催

あいさつする藤野理事長（左）と大木実行委員長（中央）、大谷局長（右）

県内外から240人参加

国際観光文化交流協会（藤野公孝理事長）と道後温泉旅館協同組合（新山富左衛門理事長）、愛媛県旅館ホテル生活衛生同業組合（大木正治理事長）、日本旅館協会愛媛県支部（大木勝也支部長）は9月13日、「国際観光文化フォーラムin道後」を道後温泉の松山市立子規記念博物館で開いた。県内外の温泉地などから240人が参加した。

開会式の主催者代表あいさつで藤野公孝理事長は次のように述べた。

「国際観光文化交流協会の目的である『観光を通じた文化交流による世界平和』は、地域の文化を観光資源として世界に発信し、他の地域、また世界各国との文化交流を通じた相互理解と国際交流で、地域の産業、経済の活性化も促すものだ。本フォーラムの開催は今回が6回目で、3年前の草津温泉、2年前の下呂温泉では、温泉と旅館の持つ日本独自の『おもてなし』をテーマに掲げた。日本三古泉の一つであること道後温泉では『俳句・文学』がテーマ。開催にご尽力いただいた道後温泉の皆さまに心から感謝申し上げたい」。

また、大木正治実行委員長は「7月に発生した西日本豪雨の風評被害で厳しい状況にあるが、このフォーラムを通じて元気な道後温泉の姿を全国に発信したい」と力強くあいさつ。

来賓の大谷雅実四国運輸局長は「本日、JR四国が全線運転を再開した。四国運輸局と四国ツーリズム創造機構、JR四国、四国の地方自治体と観光関連事業者は『旅で四国を元気に』をテーマに『四国観光復興キャンペーン』を展開しているが、運転再開と本フォーラムの開催が四国の観光復興をけん引してくれるものと期待している」と祝辞を述べた。

「文学活かした観光振興」テーマにシンポ

シンポジウム「文学を活かした地方の観光振興について」では、道後温泉誇れるまちづくり推進協議会の宮崎光彦会長をコーディネーターに、法政大学国際文化学部の岡村民夫教授、松山市立子規記念博物館の竹田美喜館長、木屋旅館のグレブ・バルトロメウス館主がパネリストとして登壇。岡本教授の基調スピーチ「本格温泉小説のはじまり」の後、パネリスト3人によるシンポジウムを実施した。

岡村教授は「日本初の本格温泉小説は、道後温泉が舞台の夏目漱石の『坊っちゃん』。また道後温泉は、近代俳句生誕の地でもある」と紹介。

竹田館長は「松山市では、昨年『子規・漱石生誕150年記念』でさまざまな行事が催されたが、松山市の行政は文化・芸術に理解がある。文化・ことば課があり、正岡子規や高浜虚子など多くの文人や俳人を輩出し、夏目漱石の『坊っちゃん』や司馬遼太郎の『坂の上の雲』など小説の舞台にもなった文化的土壌を、文化振興、地域活性化、まちのPRに生かしている」と話した。

ポーランド生まれのドイツ人で、宇和島市が所有する「木屋旅館」の管理・運営を行っているバルトロメウス氏は、「夏目漱石の翻訳本は海外でも広く読まれている。日本文学で温泉に興味を持ち、一般の日本人よりも温泉文化に詳しくなっている西洋人も多い。サムライ、ゲイシャ、スシの次にオンセンが来るくらいだ（笑）。「HAIKU」は外国語の辞書にも載る国際語で、「WASHOKU」に次ぐ世界遺産（ユネスコの無形文化遺産）登録を目指す動きも出てきている」と語った。

シンポジウム「文学を活かした地方の観光振興について」

◎岡本教授の講演要旨

尾崎紅葉の「金色夜叉」（明治31〜36年）には熱海温泉と那須塩原温泉が、徳富蘆花の「不如帰」（明治31〜32年）には伊香保温泉が登場する。明治の二大ベストセラー小説だが、川端康成は「温泉雑記」の中で、「『金色夜叉』や『不如帰』は余りに有名であるけれども、熱海や伊香保を書いた小説とは決していえない。書いてあるのは、熱海や伊香保の景色だけである」と述べている。

本格温泉小説の創始者は夏目漱石で、明治39年の温泉小説三部作として「坊っちゃん」（道後温泉）、「草枕」（小天温泉〈湯ノ浦温泉〉）、「二百十日」（内牧温泉）がある。

日本近代文学と温泉は縁が深く、大正、昭和では、田山花袋「赤い腰掛け」、志賀直哉「城の崎にて」、川端康成「伊豆の踊子」「雪国」、梶井基次郎「温泉」、田宮虎彦「銀心中」、井上靖「しろばんば」などの作品がある。

俳人・夏井さんが講演

松山市在住の俳人、夏井いつきさんは記念講演「俳句を知れば世界が変わる」で登壇。全国の高校生が俳句を競う「俳句甲子園」の取り組みを紹介した上で、「俳句と観光を結び付けて、松山という俳句の都を愛してくれる人を増やしていく活動を続けている」と語り、正岡子規を生んだ松山にとって俳句は重要な観光資源であると訴えた。

◎講演要旨

30年前の30代の頃、「俳句で町おこし、地域おこし」をやろうと思い立ち、松山で全国高校俳句選手権「俳句甲子園」を開催する構想を練り上げた。発起人会の席上で、予算3千万円の調達先を全く考えていなかったことが露呈し、計画は頓挫した。

中学校の教員を8年間やっていた経験から、子どもたちに俳句の種をまこうと考えていた。小学生に俳句を教える活動などを続けながら、講演会では「俳句甲子園を松山で開きたい」と訴え続けた。ある場所の講演で、松山青年会議所（松山JC）の文化発信委員会メンバーと出会い、彼らが活動支援を申し出てくれた。予算規模は60万円だったが「小さく産んで大きく育てよう」と誓い合った。

第1回俳句甲子園は松山大学で開いた。松山東高校、松山盲学校など9校11チームが参加してくれた。5人1組のチームが議論で俳句の鑑賞力を競い合う。松山東高校は、現在では俳句甲子園の常連校だが、第1回の参加チームはラグビー部だった。

俳句甲子園は今年の8月下旬に第21回大会を迎えた。主催は松山JCから独立したNPO法人俳句甲子園実行委員会に移り、予算規模も3千万規模になった。ただ地方大会で勝ち上がった学校が、松山の全国大会に出場するという甲子園スタイルなので、運営予算は常に足りない。地方大会の運営は、俳句甲子園のOBOGがボランティアスタッフとして支えてくれている。

過去10回優勝している東京の開成高校は、毎回、父兄の大応援団が松山を訪れる。来年の宿の予約まで済ませて帰る。日本全国の俳句結社も俳句甲子園を見るために松山に来る。俳句甲子園は、俳句と観光を結び付けた。

私が、TBSテレビ「プレバト!!」の俳句コーナーに出演していることで、いま全国に俳人予備軍が増えていると思う。正岡子規を生んだ俳都、松山に全国の俳句ファンを呼び寄せる活動をこれからも続けていく。

松山市在住の俳人、夏井いつきさんの記念講演

交流会

交流会では「坊っちゃん劇場」が「よろこびのうた」を披露

道後湯之町検番によるお座付き、芸者踊りと三味線